



# コーパス調査に基づく現代日本語における非和語系語彙の用法解明と日本語教育への応用

鄧, 琪

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2023-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8235号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008235>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

## 論文要旨

氏名 鄧 琪

専攻 グローバル文化

指導教員氏名 石川 慎一郎

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

コーパス調査に基づく現代日本語における非和語系語彙の用法解明と日本語教育への応用

### 論文要旨

日本語の語彙は、和語と、非和語系語彙(漢語・外来語など)に大別される。非和語系語彙は日本語の語彙全体の6割以上を占めるとされ、日本語語彙の重要な一部となっているが、従来の日本語学・日本語教育学では、和語に比べ、非和語系語彙については必ずしも十分な注目が払われてこなかった。こうした現状をふまえ、本研究は、コーパス言語学的手法を援用し、(1)日本語における非和語系語彙の諸相の科学的な解明、(2)日本語学習者による非和語系語彙の使用実態の解明、(3)中国語を母語とする日本語学習者を対象とした非和語系語彙の指導指針の提案、の3点を目的とする。以下、各部・各章の内容について簡潔に要約する。

本論文は、全4部、14章から構成される。第1部「研究の枠組み」には4つの章が含まれる。まず、第1章「はじめに」では、日本語および日本語教育における非和語系語彙の位置づけを確認し、本研究の目的と構成を説明する。第2章「研究対象としての非和語系語彙」では、非和語系語彙の定義、日本語学および日本語教育における扱い、研究の現状を整理する。第3章「先行研究」では、本研究で扱う研究課題に即して、関連する先行研究を概観する。最後に、第4章「リサーチデザイン」では、本論文で使用したデータおよび統計手法について概説する。

第2部「非和語系語彙の言語特性の解明」には6つの章が含まれる。これらの章では、日本語母語話者コーパスの調査を通して、非和語系語彙の使用実態を解明した後、統語論、意味論、形態論、語用論の観点からその特性を検討する。

まず、第5章「使用実態：コーパスに基づく重要語彙の抽出」では、11種の言語変種ごとに頻度調査を実施し、頻度とレンジの2観点を組み合わせて重要語抽出を行った結果、「重要漢語」として2,865語、「重要外来語」として1,612語が特定された。

第6章「統語論的特性：体言接続の問題(1)」では、非和語系語彙に関わる各種の統語的特性の中から連体接続の問題に焦点を絞り、非和語系語彙と5種の連体標識(「ナ」「ノ」「シタ」「的」「的ナ)の共起許容度を調査し、あわせて、「安定」と「オープン」をサンプルとして連体標識による意味機能の違いを検証した結果、共起許容度は「ノ」が最も高いこと、「安定」「オープン」ともに「シタ」との接続が多いこと、「安定ナ」や「オープンナ」など一部の連体修飾パターンはジャンル制約があることなどが明らかになった。

第7章「統語論的特性：体言接続の問題(2)」では、前章の議論を発展させ、類似した形式を持つ「ナ」と「ノ」に絞り、許容度調査と2標識の選択モデルの構築を試みた結果、「ナ」が多数を占めること、外来語・漢語ともに純粋な両用型は少ないこと、共起要素に基づく判別モデルの精度は「ナ」が高いことなどが確認された。

第8章「意味論的特性：類義漢語・外来語の使い分けの問題」では、「ストップ」と「停止」を取り上げ、両者の意味論的差異を調査した結果、「停止」に比べ、「ストップ」のほうが強制的ニュアンスを持ち、くだけた文脈で好まれ、抵抗の大きいものや進行中の動作を含意する語と共起しやすいこと、などが明らかになった。

第9章「形態論的特性：表記ゆれの問題」では、漢語副詞の仮名表記(例：もちろん/勿論)と外来語の連母音表記(例：メイク/メーク)を調査した結果、漢字の意味が希薄化した漢語が仮名表記されやすいこと、外来語の連母音表記は原語のスペルに影響されることなどが明らかになった。

第10章「語用論的特性：産出モード・産出環境の影響」では、産出モード別(書き言葉・話し言葉)に、レジスター別に頻度調査を行った結果、漢語・外来語ともに書き言葉で選好される語種であること、情報伝達型テキストと対人関係テキスト間では漢語の出現率が変換することなどが示された。

以上の母語話者コーパスの調査結果をふまえ、第3部「中国語を母語とする日本語学習者のための非和語系語彙指導」では学習者コーパスの分析を行う。第3部には3つの章が含まれる。

まず、第11章「使用実態の横断調査」では、横断型学習者コーパスを利用した調査を行った結果、中国語を母語とする学習者について、漢語使用パターンが母語話者に近いものの、外来語が他の学習者より過少使用されることなどが示された。

第12章「使用実態の縦断調査」では、縦断型学習者コーパスを利用した調査を行った結果、漢語については使用される異なり語数が増加し、誤用が減ること、外来語については延べ語数が増加するが「発音の誤り」が残ることなどが確認された。

第13章「指導シートの開発」では、本研究で得られた知見をふまえた指導シート開発を試みた。その後、中国語を母語とする上級学習者および日本語教師を対象としたヒアリングを行い、シートの問題点を明らかにした上で内容の改善を行った。

最後に、第4部「まとめ」として、第14章「本研究得られた知見および制約と課題」において、全体の議論を総括し、あわせて、本論文で得られた知見、また、制約と課題についてまとめた。

本研究は、従来必ずしも十分な扱いがなされていなかった非和語系語彙に焦点を定め、コーパス言語学的手法を適用することで、現代日本語におけるその位置づけと、学習者の習得上の問題を多角的に議論してきた。本研究で得られた知見は、日本語学においても日本語教育においても、価値のある情報となりうるであろう。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏 名	鄧 琪			
論文題目	コーパス調査に基づく現代日本語における非和語系語彙の用法解明と日本語教育への応用			
判 定	合 格 ・ 不 合 格			
論文チェックソフトによる確認	<input checked="" type="checkbox"/> 確認 (2022/2/4 に確認実施。審査委員に結果報告済み) <input type="checkbox"/> 未確認 理由：			
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名	論文審査結果について
	委員長	教授	柏木 治美	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員	教授	石川 慎一郎	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員	早稲田大学・教授	李 在鎬	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員			<input type="checkbox"/> 確認
	委員			<input type="checkbox"/> 確認
要 旨				
<p>(概略)</p> <p>学位申請者鄧琪氏の論文「コーパス調査に基づく現代日本語における非和語系語彙の用法解明と日本語教育への応用」(全 417 ページ)は、日本語学習者にとって習得が困難であるとされる非和語系語彙(漢語・外来語)を対象として、コーパス言語学の分析手法に基づく分析を行い、その用法を解明し、日本語教育への応用の可能性を論じたものである。</p> <p>(提出論文の内容)</p> <p>本論文は、全 4 部、14 章から構成される。第 1 部「研究の枠組み」には 4 つの章が含まれる。まず、第 1 章「はじめに」では、日本語および日本語教育における非和語系語彙の位置づけが確認され、本研究の目的と構成が説明される。第 2 章「研究対象としての非和語系語彙」では、非和語系語彙の定義、日本語学および日本語教育における扱い、研究の現状が整理される。第 3 章「先行研究」では、本研究で扱う研究課題に即して、関連する先行研究が概観される。最後に、第 4 章「リサーチデザイン」では、本論文で使用したデータおよび統計手法について概説がなされる。</p>				

第 II 部「非和語系語彙の言語特性の解明」には 6 つの章が含まれる。まず、第 5 章「使用実態：コーパスに基づく重要語彙の抽出」では、11 種の言語変種ごとに頻度調査を実施し、頻度とレンジの 2 観点を組み合わせて重要語抽出を行った結果、「重要漢語」として 2,865 語、「重要外来語」として 1,612 語を特定したことが報告される。

第 6 章「統語論的特性：体言接続の問題 (1)」では、非和語系語彙に関わる各種の統語的特性の中から連体接続の問題に焦点を絞り、非和語系語彙と 5 種の連体標識(「ナ」「ノ」「シタ」「的」「的ナ」)の共起許容度が調査される。あわせて、「安定」と「オープン」をサンプルとして連体標識による意味機能の違いが検証される。その結果、共起許容度は「ノ」が最も高いこと、「安定」「オープン」とともに「シタ」との接続が多いこと、「安定ナ」や「オープンナ」など一部の連体修飾パターンはジャンル制約があることなどが報告される。

第 7 章「統語論的特性：体言接続の問題 (2)」では、前章の議論を発展させ、類似した形式を持つ「ナ」と「ノ」に絞り、許容度調査と 2 標識の選択モデルの構築が行われる。その結果、「ナ」が多数を占めること、外来語・漢語ともに純粋な両用型は少ないこと、共起要素に基づく判別モデルの精度は「ナ」が高いことなどが報告される。

第 8 章「意味論的特性：類義漢語・外来語の使い分けの問題」では、外来語「ストップ」と漢語「停止」を例として取り上げ、両者の意味論的差異を調査した結果、「停止」に比べ、「ストップ」のほうが強制的ニュアンスを持ち、くだけた文脈で好まれ、抵抗の大きいものや進行中の動作を含意する語と共起しやすいこと、などが報告される。

第 9 章「形態論的特性：表記ゆれの問題」では、漢語副詞の仮名表記(例：もちろん/勿論)と外来語の連母音表記(例：メイク/メーク)を調査した結果、漢字の意味が希薄化した漢語が仮名表記されやすいこと、外来語の連母音表記は原語のスペルに影響されることなどが示される。

第 10 章「語用論的特性：産出モード・産出環境の影響」では、産出モード別(書き言葉・話し言葉)に、レジスター別に頻度調査を行った結果、漢語・外来語ともに書き言葉で選好されること、情報伝達型テキストと対人関係型テキスト間では漢語の出現率が変ることなどが報告される。

第 III 部「中国語を母語とする日本語学習者のための非和語系語彙指導」では学習者コーパスの分析を行う。第 III 部には 3 つの章が含まれる。第 11 章「使用実態の横断調査」では、横断型学習者コーパスを利用した調査を行った結果、中国語を母語とする学習者について、漢語使用パターンが母語話者に近いものの、外来語が他の学習者より過少使用されることなどが示される。

第 12 章「使用実態の縦断調査」では、縦断型学習者コーパスを利用した調査を行った結果、漢語については使用される異なり語数が増加し、誤用が減ること、外来語については延べ語数が増加するが「発音の誤り」が残ることなどが示される。

第 13 章「指導シートの開発」では、本研究で得られた知見をふまえた指導シートの開発と、中国語を母語とする上級学習者および日本語教師を対象としたヒアリング結果をふまえたシートの改良について報告がなされる。

第 IV 部「まとめ」となる第 14 章「本研究得られた知見および制約と課題」では、全体の議論が総括され、あわせて、本論文で得られた知見、また、制約と課題についてのまとめが示される。

(総合評価)

本論文は、従来必ずしも十分な扱いがなされていなかった非和語系語彙に焦点を定め、コーパス言語学の手法により、現代日本語における位置づけと、学習者の習得上の問題を多角的に議論した点に独自性が認められる。本論文は、非和語系語彙の言語的・用法的特性はもとより、習得や教授までを射程におさめた包括的記述を目指した労作であり、日本語学・日本語教育学的に価値ある業績と結論できる。学位申請者はこれまでに学会・研究会で 13 回の研究発表を行い、学術論文 10 編(うち査読付き 2 本)を発表しており、研究の基礎力にも不足はない。よって、本審査委員会は、全員一致で、学位申請者である鄧琪氏に、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。